



丘の斜面に建てられた啓定陵は三つの平台と三つの踊り場からなる六段構造である

啓定帝陵



阮王朝十二代皇帝・啓定像

仏植民地下で消え行く越南阮王朝
フランスを忌み、同時に焦がれた
傀儡の王が望んだ死後の居所とは

南信之「文・写真」



ベトナム中部に位置するフエは、ベトナム最後の統一王朝となった阮朝の都が置かれていた都市である。越南阮朝は1802年に興り、1945年まで続いたことになっているが、実際は1860年代からフランスによる植民地化が徐々に進み、1885年の天津条約により清国が宗主権を失うと、数年でほぼ全土がフランスの支配下となった。それ以後、実権を失った阮朝はフランスの傀儡となることで延命されていたに過ぎない。

阮朝十二代皇帝・啓定（在位1916～1925年）の陵墓はフエ南郊の丘の斜面に立つ。龍を型取った手すりが這う石階段を登ってゆくと、そこにもまた龍を刻んだ石造の門がそびえる。門をくぐると奥に石亭が立つ広場があり、亭の前面左右には王朝官吏たちの石像、さらにその後ろには軍馬や象を従えた兵士らの塑像群が並ぶ。

啓定は仏植民支配下に即位し、パリに長期滞在したこともある。その影響からか、啓定陵は欧亜折衷様式であると聞いていたのだが、ここまでは、ほぼ忠実に中国式に倣って造られているように見える。さらに階段を登り、皇帝の遺体が安置される主殿に至って、やっと「欧」の部分が見て取れた。入り口や窓の両脇のバロック風の飾り柱、そして曲線的な鉄製の窓飾りなどがそれである。しかし、それら「欧」の要素はあまりに希薄で、強烈な中華色に埋もれてしまっていた。

主殿に足を踏み入れると、そこには生前の啓定の姿を忠実に模したとされる銅像が立つ。細身でなで肩の帝は洋装をまとっているが、服の柄は中華圏では皇帝の象徴たる龍である。また、右胸に付けた徽章には「大南天子（越南の天子）」の文字が読み取れる。



本殿の外装には欧亜折衷の装飾が施されている。ただし、「欧」の部分はそれほど目立たない



壁に掛けられた古ぼけた王族の集合写真を眺める。目を凝らさねば、皇后や側室たちが並ぶなかから啓定を見つけることができない。なぜなら、小柄な啓定は顔に化粧を施して美しく着飾っており、一見女性のように見えるからだ。啓定は同性愛者であったと噂され、現地の観光ガイドなどは、おっぴらに「ゲイ・キング」などと呼んで茶化しているが、無論、本人がカミングアウトしていたわけではない。

彼には皇后と10人あまりの側室がいたが、子供は男児一人のみ。その息子とは、後に越南のラスト・エンペラーとなる保大^{バオダイ}である。1973年8月23日のニューヨーク・タイムズに、すでに紫禁城を離れ、フエのマンションで慎ましく暮らす啓定の正室・端熙元皇后と側室らのインタビュー記事が載っている。当時はベトナム戦争の最中で、戦況だけでなく文化から米国メディアをにぎわせた。そのインタビューのなかで、啓定の最もお気に入りだったとされる側室が、「私たちは仲睦まじかった……でも皇帝は性にはあまり興味はなかった」と語っている。これは、「女性に興味はなかった」と婉曲に伝えたかったと勘ぐれなくもない。

啓 定の遺体が安置されている中央ホールのすべての壁面と天井にはタイルや象眼で極彩色の装飾が施されていて、なにやらフラ



上：啓定の遺体が安置される主殿内部の壁や天井は極彩色のタイルや象眼で飾られている
下：生気を感じられない啓定の遺影。病弱であった啓定は肺結核を患い40歳で他界した

ンスの宮殿のような派手さである。しかし、物の配置や装飾のモチーフは紛れもなく中華風で、中央に置かれた啓定の坐像も中華式の礼服を身につけている。

一見は豪華な主殿も仔細に観察すると、哀しいかな安普請が目立つ。柱はコンクリート、モザイクには破れた酒瓶や茶碗の破片なども使われ、ガラスの欠片のいくつかには日本のビールの銘柄が読み取れる。その見せかけの華やかさとは裏腹に、啓定陵に漂うのは滅び行く王朝の悲哀であった。事実、共産革命後フランスに亡命した息子の保大は死後パリに埋葬されたため、啓定陵はベトナム最後の帝陵となってしまうのである。